



里親の成熟プロセスに影響を及ぼす里親支援

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉余子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15564

論文

里親の成熟プロセスに影響を及ぼす里親支援

伊藤 嘉余子

要 旨

本研究では、里親自身の成熟とそれに影響する関係機関等との関わりについて分析することによって、今後、必要となる里親支援の内容や視点等について明らかにすることを目的として、里親を対象にインタビュー調査を実施した。

分析の結果、以下の3点の必要性が示唆された。(1) 里親に対する受容・共感的な関わりと具体的な承認・評価、(2) 里親にとって複数の理解者・支援者の存在、(3) 里子の子育てにおける専門的かつ具体的な支援。

キーワード：里親、里親支援、里親の成熟

I. 研究の動機と研究目的

1. 日本の社会的養護における「家庭養護（里親養育）」推進の流れと先行研究

2009（平成21）年12月に、国連総会で「児童の代替的養護に関する指針」が採択された。これを受けて日本政府は、この指針で使われている用語に合わせて「家庭養護（family-based care）」と「家庭的養護（family-like care）」を区別し、前者を里親家庭やファミリーホーム、後者を施設養護としてのユニットケアや地域小規模児童養護施設等であると定義した。さらに、政府は2011年には「社会的養護の課題と将来像」をまとめ、その中で里親委託率の向上（委託率30%）を目標とし、その達成に向けて、里親制度の拡充を含めた社会的養護制度の新たな施策づくりを推進している。

里親委託を積極的に推進し、里親制度を活性化

すべきだという機運が高まる中で、単に里親委託率を上げるだけでなく、委託後いかに安定した里親養育を継続できるよう支援するべきかという視点から、日本における里親支援に関する検討や研究も活発化しつつある。2010年には雑誌「世界の児童と母性」(69)¹⁾が、2011年には雑誌「新しい家族」(54)²⁾が、それぞれ「里親支援」をテーマにした特集を組み、多くの有識者・関係者の見解やアイデアが紹介されている。

また、奈良・阿部・鈴木（2011）は、里親のソーシャルサポートと情緒的疲弊に着目した調査結果から、里親にとっての家族や里親仲間によるサポートの重要性を指摘するとともに、里親夫婦とともに「秘密を共有できる存在」としての児相が果たす里親支援の役割の重要性を指摘している。宮里・森本（2012）は、「良い里親だ」「信頼できる」等といった里親への「承認役割」を児童相談所（以下、児相）が果たすことと里親同士の連帯の重要性について指摘している。

多くの先行研究が、里親支援における児相の役割の重要性を指摘しているが、現在の児相に里親

2014年1月30日 受付日
2014年6月6日 受理日
ITO Kayoko（大阪府立大学）

支援機能の多くを求めることは果たして現実的なのか、職員数や虐待対応に追われている現状を鑑みても疑問が残る。措置決定機関としての児相の役割や存在は大きい、日々の里親養育を具体的に支援できる仕組みを地域に根差した形で実現できた方がよいのではないかと。西郷（2013）は、「里親」への支援として特化したものだけでなく、市町村における子育て支援の里親支援への活用の一必要性を指摘している。近年、乳児院や児童養護施設における里親支援専門相談員配置や、里親支援事業の民間団体への委託等が進められ、里親支援体制を整備しようという動きは活発化しつつあるといえる。児相による支援を含め、里親にとってどのような支援・関わりが有効に作用するのか検討した上で、地域に根差した里親支援体制のあり方について考究すべきではないかと考える。

2. 研究目的

上記のような背景と問題意識を踏まえ、本研究では、里親を対象としたインタビュー調査結果から、里親自身が感じる「里親としての成熟」とそれに影響する関係機関等との関わりから、今後、必要となる里親支援の内容や視点等について明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象者

調査対象者は、里親として現在里子を養育している、あるいは、過去に里親として里子を養育した経験のある里親である。調査対象者の選定については、14ヶ所の児相の協力を得て、各里親家庭（585家庭）に郵送にて「インタビュー調査協力依頼状」を送付し、協力可能者を募るという方法を用いた。その結果、97名の里親家庭から「インタビュー調査協力可能」との返事を頂き、その中から実際に15名の協力を得ることができた。調査対象者15名の属性については、男性4名、女性11名、専門里親4名、養子縁組里親4名、養育里親7

名であり、いずれの里親も1名以上の里子の養育を経験している。インタビュー実施時期は、2013年9月から2013年11月である。

2. データ収集方法

筆者が調査対象者に対して個別に半構造化面接を行った。インタビューの内容は、基本属性、里親登録年、これまでの委託児童数、複数児童の養育経験がある場合は今回中心に語ってもらう児童1名の養育年数と委託児童の基本情報、養育過程で直面した課題と活用した支援、今後里親支援として求めたい内容、で構成した。「養育過程で直面した課題と活用した支援」については、里親としての成長という視点も踏まえて、エピソードを自由に語ってもらった。

インタビュー内容は、調査対象者の承諾を得て録音し、逐語録として整理した。面接時間は1人90分から120分であった。面接場所については、対象者個々が希望する場を選定し、プライバシーが保てる環境で行った。

3. 分析方法

得られたデータは、帰納的アプローチによる定性的データを処理する方法である Krippendorff（1980）によるメッセージ分析（内容分析）法に基づいて分析を行った。

この分析法は、メッセージがもつ、ある特定の属性を客観的かつ体系的に同定することによって推論を行うことを目的としたデータ分析法である。KJ法やグラウンデッド・セオリー等のように、新しいアイデアや理論を生み出すことを目的とした分析法とは異なり、この内容分析法は、質的分析法の中でも、とりわけ「人と人との関わり」や「コミュニケーションの内容・質・意図」等に焦点をおき、言葉や文字データを対象に、内在するメッセージ性を読み取ろうとする点が特徴である³⁾。

本研究では、里親自身の語りの中から、里親の成熟プロセスおよびそのプロセスに影響したと考

えられる外部からの支援や関わりに対するメッセージを抽出し、構造化することを目的としたことから、この内容分析法を用いることが適当であると判断した。

同分析法は、データとして記録されている文脈を特定の分析単位に分割し、集約・カテゴリー化しながら、メッセージ性のある因子を抽出し整理した上で、因子相互間の関連性について検討し、構造化することによって現象を推論し探索するという手順で進められる。具体的な分析手続は、以下のとおりである。①データの中から、里親支援に関わる内容を抽出する。②抽出した全項目を共通した内容ごとにコードを付して分類する。③分類した項目について、より広い領域としてのサブカテゴリー、カテゴリーに整理する。

なお、これら一連の作業過程において、分析の信頼性および客観性を確保するため、筆者を含めて3名で分類、確認を進めた。

4. 倫理的配慮

本研究は、大阪府立大学大学院人間社会学研究科が設置する研究倫理委員会において審査を受け、倫理的配慮がなされていると承認を受けたものである。

インタビューで収集したデータの管理と破棄、研究結果の公表については、匿名性を保障し、プライバシーの保護に十分配慮する旨をインタビュー協力者に確認している。

Ⅲ. 結 果

分析の結果、まず、「里親の成熟プロセス」を示すコードとして38のコードを抽出した。さらに、それらのコードをその内容の類似性や相違性に基づき分類した結果、17のサブカテゴリー、7のカテゴリーを抽出することができた。

7のカテゴリーは【緊張・不安】【里子養育の楽しさ・やりがい】【自信の喪失】【理解者・支援者が複数いる安心感】【あきらめ】【逃げたい気持ち】

【里親子関係への自信】であった。

次に、「里親の成熟プロセスに影響する要素」を占めるコードとして46のコードを抽出した。さらに、それらのコードをその内容の類似性や相違性に基づき分類した結果、21のサブカテゴリー、4のカテゴリーを抽出することができた。

4のカテゴリーは【専門機関との関わり】【里親同士の関わり】【里親の家族・親族との関わり】【地域との関わり】であった。さらにこれらのカテゴリーは、里親子関係に与えた影響の質によってそれぞれ【安心感・安定感】と【不安感・不安定感】に分類された。

カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >、コードを「 」で表し、さらに、コードの根拠となったテキストの引用部分については「 」と斜体の文字で表しながら、里親子関係の成熟プロセスに影響する要素について説明する。なお、抽出したカテゴリー、サブカテゴリー、コードについて表1と表2に示した。

以下に、里親の成熟プロセスに影響する要素についてカテゴリーごとに説明する。

1. 【専門機関との関わり】

このカテゴリーは、里子を養育するにあたって関わる専門機関から受ける支援や指導等に対する期待や感謝といった、里親子関係や里親自身の成長にポジティブに作用する関わりと、逆に、里親を不安にさせたネガティブな関わりとで構成されている。なお、ここで言う「専門機関」とは、児相、地域の里親会、NPO等民間の里親支援機関を意味する。

1-1. 【専門機関との関わり】による【安心感・安定感】

前者のポジティブに作用した関わりは、<専門的な支援><受容・共感的な相談援助><里子に関する情報提供><里親研修での収穫>の4つのサブカテゴリーから構成された。

<専門的な支援>では、里子がもつ養育上の課

表1 里親の成熟プロセスを示す要素

カテゴリー (7)	サブカテゴリー (17)	コード (38)
緊張・不安	里親としての緊張・不安	子どもを受け入れることへの緊張／児相からの評価への不安
	養育に対する不安	里親子関係構築／子育てできるのかという不安／里親の実家族関係への不安
里子養育の 楽しさ・やりがい	里子の成長への喜び	子育ての楽しさの発見／里親同士の共感
	里親の努力への評価・承認	児相からの評価・賞賛／里親同士の支え合い
	里親子関係進展を感じる瞬間	里子からの言葉／里子の行動の変化
自信の喪失	子どもの問題行動	里子の問題行動や反抗等／実子の問題行動や反抗等
	里子の発達の遅れによる不安	知識・情報の不足／里親としての関わりの振り返り／無力／限界感
理解者・支援者が複数いる安心感	里親同士のつながり	先輩里親からの助言／里親同士の受容・共感
	夫婦の協力	配偶者の言動の変化／配偶者からの心に残るひとこと
	配偶者以外の家族・親族の協力	実子の言動／里親の実家の協力
あきらめ	里親子関係の不安定感	里子との意思疎通困難／実親の存在／里子の反抗・反発
	里親としての力不足	「答え」が得られない不安／うまくいっている里親との比較
	孤独・孤立感	里親家族内での孤立／里親サロンでの孤立／地域で感じる孤立
逃げたい気持ち	転居・転校による回避	里子が通う学校との不調和／近隣地域とのトラブル
	里親養育をやめるという選択	里子の委託解除／里親登録抹消
里親子関係への自信	里子とのコミュニケーション	里子からの「家族」「信頼」という言葉／里子からの感謝
	自分以外の人の変化	関係機関からの評価や賞賛／家族の反応／地域からの反応

題について、具体的な問題解決や負担軽減につながるような専門職による支援を受けることによって、里親の里子理解が深まったり、里親子関係が良い方向に進んだりする等といった効果が強調された。例えば、障害や疾病をもつ里子の養育について相談に行った際に、医療機関等「福祉以外の専門職の紹介」を受け、実際に、カウンセラーやPT、OT、ST等といった「福祉以外の専門職による具体的な支援」を受けることによって、里子の問題行動が減少したり、里子の情緒の安定がもたらされたりしたというものである。

また、専門機関のワーカーや相談員等による＜受容・共感的な相談援助＞によって、里親自身

がエンパワメントされ、粘り強く里子と向き合い、前向きに里子の養育を継続することができたという実感をもつ里親が多いことが明らかになった。受容・共感的なワーカー達は、里子の養育に悩み相談に来た「里親の努力を承認」し、委託後の里子の変化や成長を里親とともに確認しながら、「養育過程の評価・賞賛」を行っていた。さらに「里親への信頼の表明」を行い、里親が安心して里子の養育と向き合えるよう励ましていた。

＜里子に関する情報提供＞では、主に児相からの十分な情報提供によって、里親による里子理解が深まることが強調された。里子のもつ「障害や疾病等の診断」内容が明らかになることによ

表2 里親の成熟プロセスに影響する要素

カテゴリー (4)	サブカテゴリー (21)	コード (46)
1. 専門機関との関わり	専門的な支援	福祉以外の専門職の紹介／福祉以外の専門職による具体的支援
	安心感 安定感	受容・共感的な相談援助
		里親の努力の承認／養育過程の評価・賞賛／里親への信頼の表明
		里子に関する情報提供
		障害や疾病等の診断／里子の実親に関する情報
		里親研修での収穫
2. 里親同士の関わり	不安感 不安定感	里子養育に関する専門知識の習得／里親仲間との意識の共有
		情報の不足・不一致
		里子に関する情報の不足／情報と里子の実態の不一致／里子の実親に関する情報の不足／子育てに関する情報不足
		里親への批判・非難
		抽象的な問題点の指摘／努力に対する不承認／一方的な叱責・批判
		タイムリーな相談が困難な状況
3. 里親の家族との関わり	安心感 安定感	児相のワーカーが多忙・不在／24時間体制でない／遠方
		先輩里親からの助言
		経験に基づく助言／具体的な情報の提供
		具体的・物理的な支援
	不安感 不安定感	電話・訪問による相談・支援／レスパイト
		子どもの成長を踏まえた励まし／これまでの養育過程の承認・評価
4. 地域との関わり	不安感 不安定感	里親サロンでの孤立感
		話にくい雰囲気／悩みを受けとめられない感覚
		他と比較しての焦燥感
		里親不適格かという自己嫌悪／自分だけ上手くない焦り
	安心感 安定感	夫婦間の助け合い
		養育上の役割分担／心理的サポート
5. 里親の家族との関わり	安心感 安定感	実家による支援
		レスパイト／多様な形での応援メッセージ
		実子・里子の理解
		感謝の気持ちの表明／心理的サポート
	不安感 不安定感	実子・里子の反発
		望んだ結果ではない／「里子だから」という反発
6. 地域との関わり	不安感 不安定感	家族間の責任転嫁
		コミュニケーションの拒絶／問題からの逃避
		学校の理解
		担任との連携体制／複数教員間での情報共有
	安心感 安定感	里子の級友の家族の理解
		家族ぐるみの交流／里子の様子の情報提供
7. 地域との関わり	不安感 不安定感	学校の無理解
		配慮のない声かけ・関わり／情報共有が困難な関係
		地域の無理解・偏見
		興味本位での詮索／「里子だから」という決めつけ

て、里子の問題行動等が、里親の育て方が悪いせいではなく、里子自身が抱えている課題に原因があるのだとわかり、里親として前向きに里子の養育に向き合えるようになったと言う。同様に「里子の実親に関する情報」を里親が把握し、里親子で里子の実親に関する話題を共有するようになって

て以降、里子自身が情緒的に安定するとともに、里親子関係が1段階ステップアップしたような感覚をもったという状況が示された。

＜里親研修での収穫＞では、専門機関が主催する里親研修において「里子養育に関する専門知識の習得」をすることによって、里親として自信を

もって里子と向き合えるようになるとともに、研修と一緒に受講した「里親仲間との意識の共有」を通して、自分と同じ悩みやつまずきを抱える里親の存在を知り、自分だけが里親不適格なのではないかという自己嫌悪から脱出できるという状況が示された。

1-2. 【専門機関との関わり】による【不安感・不安定感】

このカテゴリーは＜情報の不足・不一致＞＜里親への批判・非難＞＜タイムリーな相談が困難な状況＞の3つのサブカテゴリーで構成される。

＜情報の不足・不一致＞では、「里子に関する情報の不足」「里子の実親に関する情報の不足」によって、里親自身が不安になることや、児相から事前に聞いていた「情報と里子の実態の不一致」によって、里親が混乱し不安定になることが示された。

＜里親への批判・非難＞では、専門機関に相談した際に「もっと頑張って下さい」「上手に子どもと関わって下さい」等と「抽象的な助言」しかされないことによって、専門機関への不信感が強くなる状況が示された。また里親の「努力に対する不承認」や里親への「一方的な叱責・批判」によって、里親が養育に自信をなくしたり、専門機関に相談しづらくなったりして、孤独感・孤立感を強めることがあることも明らかになった。

＜タイムリーな相談が困難な状況＞では、主に非行等の行動化がある子どもの養育を担う里親から「児相職員が多忙・不在」のことが多いため緊急時の対応・支援が望めないことが多いため「24時間体制でSOSが出せる体制」をどこかの機関が調べてくれることを期待する声があった。

2. 【里親同士の関わり】

このカテゴリーは、里親同士のピアサポートによって得られる安心感・安定感につながる関わりと、里親同士の交流の中で不安感・不安定感が強まる機会に関する語りとで構成されている。

2-1. 【里親同士の関わり】による【安心感・安定感】

このカテゴリーは、＜先輩里親からの助言＞＜具体的・物理的な支援＞＜受容・共感的な励まし＞の3つのサブカテゴリーから構成される。

＜先輩里親からの助言＞では、これまでに何人も里子を養育してきた先輩里親からの「経験に基づく助言」を受けたり、子育てや学校生活等で直面する課題を解決するための「具体的な情報の提供」を受けたりすることによって、安心し、自信をもって里子の養育を行うことができることが示された。

＜具体的・物理的な支援＞では、先輩里親の方から心配してアプローチしてくれる「電話・訪問による相談支援」を受けたり、里子との関わりで疲れていることを相談していた先輩里親の方から「旅行に行くからついでにあなたの里子さんも連れて行こうか」等と「さりげないレスパイト」の提案を受けたりすることによって、気持ちが落ち着いたり、リフレッシュできたりすることがあるという状況が明らかになった。

＜受容・共感的な励まし＞では、単なる助言や経験談だけでなく、里親子の歴史を良く知る先輩里親から、「よく頑張ってると思う」「〇〇ちゃん、最初よりずいぶん表情が良くなったのは△△さんの育て方が良いからだと思う」等といった、「これまでの養育過程の承認・評価」や「子どもの成長を踏まえた励まし」を受けることによって、前向きな気持ちで里子の養育に向き合うことができるようになるという里親の心境が示された。

2-2. 【里親同士の関わり】による【不安感・不安定感】

このカテゴリーは、＜里親サロンでの孤立感＞と＜他と比較しての焦燥感＞の2つのサブカテゴリーで構成される。

＜里親サロンでの孤立感＞では、悩みや不安を共有したり、助言や情報を得たりすることを期待して里親サロンに出かけたにも関わらず、特定の

里親だけが発言している等「話しにくい雰囲気」であったり、語った悩みや愚痴等について次々と否定されたり説教されたりするのを聴くことによって、ここでは「悩みを受けとめられない感覚」をもち、孤立感や孤独感を感じ、不安になる状況が示された。

＜他と比較しての焦燥感＞では、他の里親の成功体験を多く聞く中で、困難を乗り越えられず今現在悩んでいる自分自身に対する「里親不適格かという自己嫌悪」を抱いたり、「自分だけ上手いかわからない焦り」を感じたりしてしまう心境が明らかになった。

3. 【里親の家族との関わり】

このカテゴリーは、親族を含めた里親の家族からの関わりによって得られる安心感・安定感と、家族の反応によって陥る不安感・不安定感に関する語りで構成されている。

3-1. 【里親の家族との関わり】による【安心感・安定感】

このカテゴリーは、＜夫婦間の助け合い＞＜実家による支援＞＜実子・里子の理解＞の3つのサブカテゴリーから構成される。

＜夫婦間の助け合い＞では、里母・里父の「養育上の役割分担」について夫婦で良く話し合い、戦略的に行うことによって、里子との親子関係が前進したり、夫婦・親子含めた家族関係が良い方向に転換したりするという里親自身の実感が示された。また、配偶者からの「心理的サポート」が感謝の言葉やさりげない手助け等によって提供されることによって「ひとりで子育てしているわけじゃないから大丈夫」という安心感につながることを示された。

＜実家による支援＞では、疲れた時や困った時等に里子を預かってくれる「レスパイト」の役割を実家が果たしてくれることへの安心感とともに、居住地の遠近に関わらず「里子の養育を応援してくれる」「いつでも頼ってと言ってくれてい

る」「どんな愚痴も黙ってうなずいて聞いてくれる」等といった「多様な形での応援メッセージ」を実家から得ることによって、安心して里子を養育できるという里親の心境が明らかになった。

＜実子・里子の理解＞では、実子や里子から、日頃の子育てに関する「感謝の気持ちの表明」を受けることによって、自分のこれまでの子育てが間違っていなかったと努力が報われた気持ちになるという里親の心境が明らかになった。また、家族間、親子間で争いがあった時に、実子や里子が「代弁・仲介的な役割」を果たそうとする姿に触れ、子どもの成長を喜んだり、里親である自分のことを子どもがどのように理解しているかを知り安心したりできることが示された。

3-2. 【里親の家族との関わり】による【不安感・不安定感】

このカテゴリーは、＜実子・里子の反発＞＜家族間の責任転嫁＞の2つのサブカテゴリーで構成される。

＜実子・里子の反発＞では、家族間で問題や争いごとが起こった時に、里親になることを決めた大人に責任があるのではないかと子ども側からの不満に基づいた、子ども自身が「望んだ結果ではないという怒り」に触れることによって、里親が自信をなくしたり、里親を継続できないのではないかと不安になったりすることが示された。また、里親による里子への子育ての方針や内容等に実子や里子が納得できない場面において「『里子だから（特別扱いするのか）』という反発」に触れ、里親として戸惑い不安になる状況が明らかになった。

＜家族間の責任転嫁＞では、里親の一方が悩んだ際に、その配偶者やその他の家族が、悩んでいる里親との「コミュニケーションの拒絶」を行ったり、「問題からの逃避」を行ったりすることによって、悩んでいる里親が家族内で孤立していくことがあるという状況が示された。

4. 【地域との関わり】

このカテゴリーは、主に里子が通う学校をめぐる関係を中心に、そこからもたらされる安心・安定感や不安・不安定感に関する語りから構成される。

4-1. 【地域との関わり】による【安心感・安定感】

このカテゴリーは、＜学校の理解＞＜里子の級友の家族の理解＞の2つのサブカテゴリーから構成される。

＜学校の理解＞では、里子の担任教諭との密な情報共有、理解ある発言、個別的な配慮等による「担任との連携体制」によって得られる安心感について示された。また、部活の顧問との情報共有、進級・担任交代後も継続する連携体制等から、学校における「複数教員間での情報共有」がなされていることが実感できることによって得られる安心感についても明らかになった。

＜里子の級友の家族の理解＞では、里子の級友家族と「家族ぐるみの交流」を行うことによって、里親・里子の双方が受け入れられていると実感でき、安心できるという里親の心境が明らかになった。また、里子の級友家族から「里子の様子の情報提供」を受けることによって、里親の前では見せない里子の様子を知ることができ、さらなる里子理解につながると安心できる里親の心境が示された。

4-2. 【地域との関わり】による【不安感・不安定感】

このカテゴリーは、＜学校の無理解＞＜地域の無理解・偏見＞の2つのカテゴリーから構成される。

＜学校の無理解＞では、クラス内で里子が級友から嫌がらせを受けたりした時に、里子であることを強調しすぎる等、担任による「配慮のない声かけ・関わり」がなされたり、そうした内容が担任から里親に連絡されない等、里親と学校が「情

報共有が困難な関係」にあると里親が感じることによって、里親が不安になることが示された。

＜地域の無理解・偏見＞では、里子の名字や家族背景、委託の経緯等について「興味本位での詮索」を受けることによって、この地域で里親として生活していくことに不安を感じたり自信をなくしたりすることが明らかになった。また、里子の成績が悪かったり、友達と喧嘩したりする等のトラブルが起こるとすぐに「『里子だから』という決めつけ」をされ、里親として深く傷つくことがあるということが示された。

Ⅳ. 考 察

カテゴリーとサブカテゴリーに分類した内容について、里親の成熟プロセスとの関連性について検証し、図1のようにまとめた。

1. 受容・共感的な関わりと具体的な承認・評価の必要性

【専門機関との関わり】【里親同士の関わり】において＜受容・共感的な相談援助／励まし＞が、里親に「里子の養育の楽しさ・やりがいの発見」につながっていることが明らかになった。一方で、専門機関による＜里親への批判・非難＞や里親サロンにおける「悩みを受けとめられない感覚」等、里親が関係者等から「受け入れられていない」という感覚を抱くことによって、不安定感につながることを示され、里親の成熟プロセスにおける受容・共感的な支援の必要性が明らかになったといえよう。

また、受容・共感的な関わりにおいては「子どもの成長を踏まえた励まし」や「里親の努力、養育過程への承認・評価」といった具体的なコメントを里親が求めていることが明らかになったことから、里親支援を行う者が、里親の人物や里親子関係等について日頃から詳しく把握していることが求められているといえよう。これについて宮島（2011）も、「里親養育の不調が生じる要因」の1つ

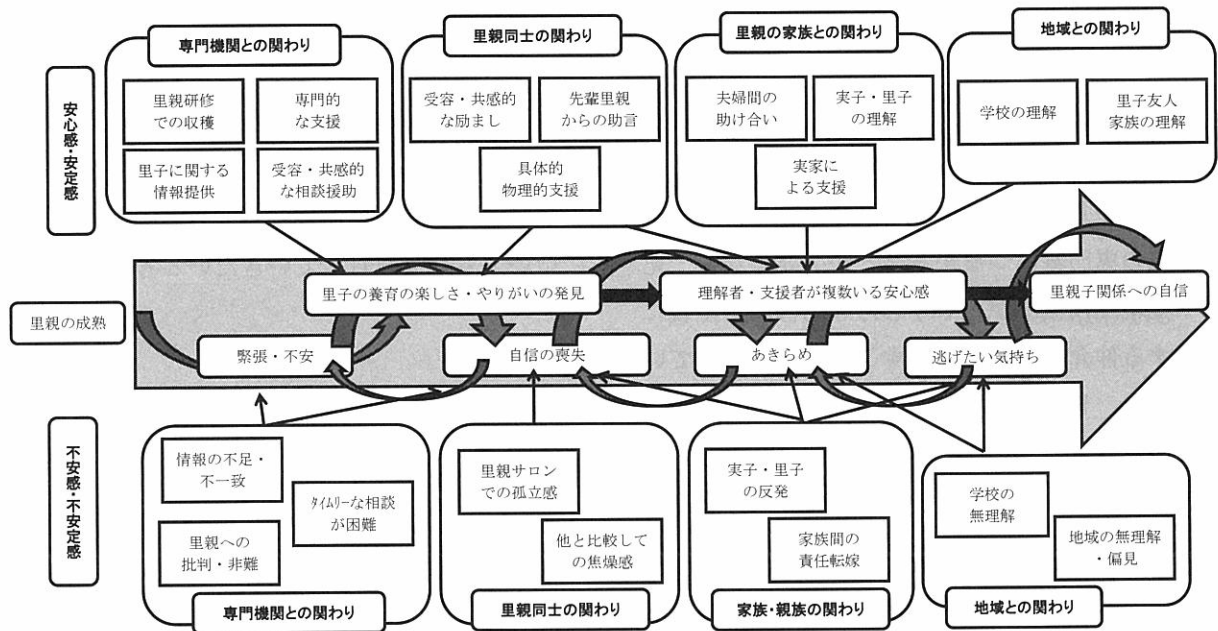


図1 里親の成熟プロセスと関連する要素

として「里親の強みと弱さが児相や支援機関に適切に把握されないために生じる不調」を挙げ、里親と児相や支援機関ワーカーとの日常的な関わりや信頼関係構築の重要性を指摘している。うわべの言葉や理解だけではない、「信頼」に基づいた根拠ある受容・共感や励まし・承認・評価を里親が求めていることが本調査結果からも確認できた。

2. 里親の理解者・支援者が複数いることの重要性

【里親同士の関わり】【里親の家族との関わり】【地域との関わり】の3つのカテゴリーにおいて強調されたのが「里親である自分を含めた家族にとっての理解者・支援者が複数いることの安心感」であった。里親制度について社会の中で関心が高まってきているといえるものの、まだまだ地域における理解は進んでいるとはいえない現状といえる。ともすれば、孤立感や孤独感を感じやすいといえる状況の中で、里親として、あるいは里親家庭として生活している自分たち家族を理解し支えようとしてくれる人が複数存在することを確認できることは、里親にとって大きな安心感につながっていることが結果からも示唆される。また＜里親研修での収穫＞として「里親仲間との意識

の共有」が挙げられていることから、気持ちや状況を共有し理解し合える存在を里親が強く求めていることがわかる。藤林（2011）は児相等の専門機関による里親支援だけでなく、地域（コミュニティ）において里親と子どもの「応援団」をつくることの重要性を指摘し、NPO法人を活用した「里親支援ボランティア」登録制度の必要性を主張している。地域の中に里親の理解者・支援者を増やしていくための積極的かつ具体的な取り組みが求められていることが本調査結果からも示唆された。さらに、里子が通う学校と良好な関係を構築できるか否かが、里親の安心感に大きく影響することも明らかになったことから、児相等里親支援機関の役割として、里親と学校との仲介機能もこれまで以上に重要視するべきであろう。

3. 子育てにおける専門的かつ具体的な支援の必要性

【専門機関との関わり】における＜専門的な支援＞＜里親研修での収穫＞、【里親同士の関わり】における＜具体的・物理的な支援＞＜先輩里親からの助言＞としての「具体的な情報提供」、さらには【里親の家族との関わり】の全般的な内容から、里親が里子を育てる上で、専門的かつ具体的で実

質的な子育て支援および情報を必要としていることが明らかとなった。

まず＜専門的な支援＞では、児相から提供される里子に関する情報が適切かつ十分であることと、里子がもつニーズによっては、社会福祉以外の領域の専門職につながるが必要になる。児相や里親支援機関が、そうした専門機関を里親に紹介する仲介的役割を果たすことが求められている。また、レスパイトや相談支援といった具体的な支援に言及し、そうした支援が、いつでも気兼ねなく利用できるという安心感が「前向きな子育てにつながる」との語りが多かったことから、「疲れても、愚痴を言っても、休憩しても大丈夫」と里親が思えるような支援体制を構築していくことが里親による安定的な養育を保障することにつながるのではないかと。そのためには、児相を中心とした都道府県単位での支援体制だけでは不十分で、市町村レベルでの里親支援体制の充実が求められているといえよう。林（2012）は、児相における里親支援体制充実だけでなく里親支援業務に民間機関を活用することの必要性を主張している。本調査からも、児相職員の多忙さ、アクセスの不便さ等を背景とした「児相への支援の求めづらさ」が明らかになっており、里親にとってより身近な支援機関の必要性とその役割を担える民間支援機関への期待が示唆された。

V. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、里親を対象としたインタビュー調査結果から、里親自身の自己評価による「里親としての成熟」とそれに影響する関係機関等との関わりについて分析することによって、今後、必要となる里親支援の内容や視点等について明らかにしようとした。その結果、先述した3点の必要性が示唆された。この内容を踏まえ、今後、児相やNPO団体等を含めた里親支援機関および実際に里親支援を担うワーカーが果たすべき機能・役割についてさらに検証するとともに、市町村におけ

る子育て支援体制のような地域密着型の里親支援のあり方について提案していきたいと考える。特に、児相だけで里親支援を担うことの限界が本調査から示唆されたため、里親支援事業内容の整理および民間委託の可能性、各機関間の役割分担等についても今後検討していきたいと考える。

付 記

本研究は、2013年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））「日本における『里親支援体制の近未来像の構築：里親・施設・行政の有機的連携』」の一部を報告するものです。本調査にご協力頂きました、児相、里親の皆様へ深謝いたします。

注

- 1) 『世界の児童と母性』（69号、2010年）では、児相をはじめとする日本における既存の里親支援機関や団体の現状と課題についてまとめられている。
- 2) 『新しい家族』（54号、2011年）では、海外や国内における先進的な里親支援の取り組みについて紹介した上で、今後の里親支援のあり方について、特に里親支援機関事業実施団体に焦点をあてて論じられている。
- 3) Krippendorff, K. (1980) *Content Analysis* (=1999, 三上俊治他訳『メッセージ分析の方法：「内容分析」への招待』勁草書房) を参考にした。

文 献

- 藤林武史（2011）「福岡市における里親支援」『里親と子ども』（6）、23-28。
- 林 浩康（2012）「社会的養護改革と里親委託推進のあり方」『里親と子ども』（7）、9-18。
- Krippendorff, K. (1980) *Content Analysis* (=1999, 三上俊治他訳『メッセージ分析の方法：「内容分析」への招待』勁草書房。)
- 宮島 清（2011）「特集にあたって：子ども・里親が不幸にならないために」『里親と子ども』（6）、6-8。
- 宮里慶子・森本美絵（2012）「養子縁組里親、養親の抱える困難とその対処：里親支援枠組みからの離脱とスティグマ」『千里金欄大学紀要』（9）、1-12。
- 奈良隆正・阿部好恵・鈴木幸雄（2011）「里親のソーシャルサポートと情緒的疲弊に関する実証的研究」『帯広大谷短期大学紀要：開学50周年記念号』（48）、47-54。
- 西郷泰之（2013）「乳幼児の子育て支援と里親支援」『里親と子ども』（8）、15-19。

Identifying the Supports Necessary to Facilitate the Maturation Process of Foster Parents

Kayoko Ito

Abstract

This study aimed to clarify the concrete supports and perspectives necessary to assist foster parents in the future. The research method chosen was to interview current foster parents. The results of the analysis identified three specific needs: (1) acceptance, empathetic support, as well as concrete approval and evaluation; (2) the development of a support system consisting of several supporters; and (3) professional advice and concrete support regarding raising foster children.

Keywords: foster parents, support for foster families, foster parent maturation.